

の五名（总部宿禰惠美麻呂・大伴宿禰乎智人・若江造家繼・出雲連
広貞・安倍朝臣真貞）の氏族に伝わっている薬方やこれまでに
五名が集めた薬方、典薬寮や内裏に残っている資料を持ち寄
って選別した。と考えれば「同撰」の記載も納得できる。

類似した薬方の選択にあたっては、古体を留めている和文
体の宣命書き、流布本のように助詞や活用語尾が小書で記さ
れているものでなく、大書である方を採用した。それが、由
緒正しさを表わす証の一つであったと思われる。

従って一般に流布している宣命書きの小書と文体で、分量
も記されていない薬方は、選択の時に採用されなかつたもの
である。

佐藤方定が発見した延喜本（寮本）が、真本であれば、古代
の医学はいうに及ばず五名に関係する諸国の神社・国造・県
主・稲置・首・史など、古代史に散見する人々の薬方も記載
されているので、飛鳥奈良時代を考える上で非常に重要な資
料になると思われる。

（平成八年十月例会）

『医則發揮』の著者河津省庵と門人山川揚庵

石 原 昂

河津省庵（一八〇〇—五二）は『医則發揮』、門人の山川揚庵
（一八一二—一六〇）は『熱病覈原』の著者として、それぞれ医

学史上にその名を残している。しかし、兩人についての人物
像は必ずしも明確にはされてはいない。

河津省庵は寛政十二年、相模国上相原村（現神奈川県相模原
市相原）に生まれた。名は卓、字は子立、隆積のちに省庵と号
した。代々医家の家に生まれ、省庵もこの道を志してまず古
医方派の漢方を学び、さらに洋医学を身につけた。

しかし洋医学の師は現在まで不明のままとなっている。長
崎に赴いてシーボルトから学んだとされているが、その確証
はない。また宇田川榛齋の門に入ったともいわれる。

儒学は芳川波山（一七九四—一八四六）から学んだ。伊豆下
田の囚山亭に於いてであった。省庵は波山から大きな影響を
受けたらしい。波山が忍藩（現在の埼玉県行田市）の侍講とし
て藩主松平忠堯に招かれ、忍に赴任したのは文政九年（一八二
六）であるが、省庵は波山の後を追うようにして天保初年（一
八三〇）頃、忍に移った。

忍で医を開いたが、まもなく名声は高まり、藩主の侍医に
挙げられた。波山の推挙もあつたであろう。省庵は嘉永五年
八月十八日この地で没し、蓮華寺に葬られた。法名を隆明院
修徳日願居士という。

忍での省庵の大きな業績は多数の刑屍解剖、この解剖所見
をもとにした『医則發揮』の刊行、ならびに種痘である。

『医則發揮』の発刊は省庵の没した嘉永五年である。しかし
波山の序は天保十一年（一八四〇）三月に書かれているので、
草稿は発刊される少なくとも十二年前に出来上がっていたも

のと考えられる。本書は五巻四冊から成っており、全て漢文で記されている。

本書には省庵の医説、即ち寒熱凝流説・四質四官説・三部区別説・生活知覚思慮説・飲食説が説かれており、また生理機能を機用部、生活部、陰部、排泄に分けて説明している。

現在の知識では理解しにくい医説であり、かなり抽象的であつて牽強附会的な説明に終始しているように思われる。また洋医学に対して激しい批判を加えているが、いずれも的をえたものとは思われない。注目されるのは人体のみでなく獸類や魚鳥類にまで及ぶ解剖をおこない、比較解剖学的手法によつて自説を裏付けようと意図していることである。

種痘については忍地方で広く実行しているが、これはいわゆるトルコ法による人痘接種であつた。天保十二年（一八四一）に書かれたと考えられる『省庵種痘』なる筆書本が残されており、これによると種痘法はスーテン国のローセンスティン小児全書から学び、その術を文九年江戸参府途上のシールポルトから三島にて学んだと記されている。

小児全書とは宇田川榛斎による『小児諸病治療全書』と考えられる。この訳書は公刊されておらず、写本も少ないことからみて、省庵が榛斎の門にあつたことを示唆している。

省庵の門人であつた山川揚庵は武蔵国小岩井村（現埼玉県飯能市小岩井）の生まれであり、その著『熱病叢原』は伝染病を含む発熱疾患について記したものである。

本書は安政四年（一八五七）に刊行され、三巻三冊から成つ

ている。本文は漢文で書かれ、省庵の医説に従つてはいるが内容は一段と優れていて通説して違和感を感じさせない。

本書にはすでに病原體、潜伏期、免疫の概念が記されていて、揚庵の非凡な能力を示すものとして興味深い。なお版木の全てが飯能市の山川家に保存されている。

（平成八年十月例会）

疾病史から見た「傷寒論」

中村 昭

『傷寒論』はとくにわが国の古医方派では聖典となつた感があるが、もとより張仲景はそういうつもりでこれを書いたのではないだろう。後漢末という一つの歴史的時期に彼が遭遇した「傷寒」という病氣に対して、それまでの医書や口伝を総合し、また自らの経験を加えて一つの臨床医書を書いたと思われる。それは抽象的な熱病論というにはあまりにも具体的に富んでいる。「傷寒」とは何であるか。

「傷寒」が流行病であり熱病であつたことは間違いないが、それは現代医学の立場から或は疾病史の立場からどのように解釈し得るか。現代の立場から見れば、「傷寒」が文字通り「寒」を原因とする病氣と考えるわけにはゆかず、「寒」は比喩的なものと考へねばならない。或は具体的に考へれば「寒」は誘因であり、「傷寒」の眞の原因は病原微生物と考へざるを得な